

じやないか・・・ウサギの長い耳を掴(つか)みますやん。



ペットブームなんて優雅なものじゃない。欲と道連れ。日本国中がウサギの飼育ブームに狂奔した。明治初年のこと。ブームには高価、珍種を競うためのインチキやそれに引っかけた詐欺(さぎ)もつきもの。ついに明治六年、政府は禁止令を告示して、一羽につき一円のウサギ税を課した。当時の物価で一円は？と明正昭三代の物価一覧の資料を探したが、書架のどこかへしまい込んで見当たらない。

「クソッ！」



・・・と怒鳴ったお陰で「ウサギの糞学」紹介を思いついた。物が切れぎれて続かないたとえを、「ウサギの糞」というが、皆さんご存知のそれは第二次の排泄物なので、第一次は首を肛門まで曲げて、おのれが排泄する軟便をきれいに嘗め取る。その栄養を胃腸が吸収し尽くした後の、ポロポロの代物が皆様ご存じの兎糞なんです。

そうそう、昔から短かな文章を集めた本に「兎糞録(とふんろく)」と名付けたもんだ。「宮崎それがしの本欄

連載もそれだな」という声が耳のせいか聞こえた。「あ、ウサギの逆立ち！」(耳が痛い)。



糞からの連想だが、野生のウサギは窟(あな)を掘って居住する。チャンとトイレの位置も一定の場所に決めているようだ。

そこで思い出したのがシナの怪奇短編小説集蒲松齡の『聊齋私異(りようさいしい)』に出てくる「狡兎三窟(こうとさんくつ)」という啖呵(たんか)なんか。一人の側妾(そばめ)をもっている男に向かって、本妻が罵るのです。

「三つも窟(あな)を持つ狡い兎め」



ウサギの付いた、またはちなんだ市町村名って見当たらない。探してやろうと躍起になったが、アウト。やっとこんな例を見つけた。

所は現在の島根県簸(ひ)川郡斐(ひ)川町。昔同地に鶉(うさぎ)という名の峠があり、鶯(うさぎ)という湖畔集落があった。二つが合併した村の名が鶉鶯(うさぎ)村。



①「あれこれ」「さまざま」とか、
②「いずれにしても」とか「なにはともあれ」という表現に「とにかく」

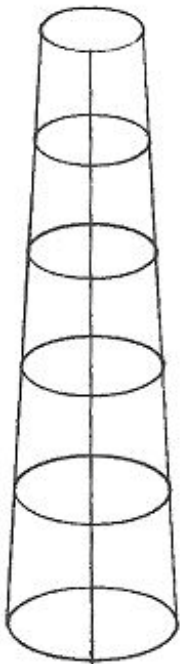
という語を使うのはいいが、「兎に角」と表現するのは宛字もルール違反。

角(つの)の生えた兎と毛の生えた兎は存在しない。「兎角(うさぎ)毛」の熟語もありまして。

編集者の 蛇 足

十干 甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸
十二支 子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥

“イメージを建てる”



株式会社
灘工務店

〒541-0046
大阪市中央区平野町
1-4-1

TEL 06-6228-0126
FAX 06-6228-0742

事務局より

皆様方には本会の活動にご協力賜り、厚く感謝しております。さて、諸事情から、今後は皆様方から会費を頂かないこととなりました。今後の瓦版の発行については、資金の続く限り続けてまいります。これまでご購入いただいた方々には今後も送付させていただきますので、どうぞよろしくお願いたします。

科学暦普及協会事務局

芦屋市奥池町二十一-一八
角辻総合人間科学研究所 気付
電話 〇七九七・三八〇・二二一